

臨床

歴史的事項： 筋ジストロフィーと私の46年

国立病院機構あきた病院脳神経内科/国立病院機構箱根病院 名誉院長/日本筋ジストロフィー協会 専属医師 石原 傳幸

Summary

筆者は1970年に大学を卒業後、1975年に東埼玉病院の内科へ転勤し、国立病院機構箱根病院、国立病院機構あきた病院と約46年にわたり筋ジストロフィー臨床を中心にした筋疾患研究の人生を歩んできた。今回は筆者の立場からみた筋ジストロフィーにまつわる経緯を述べることにする。

KEYWORD

- 江橋 節郎
- 杉田 秀夫
- 埜中 征哉
- 荒畑 喜一
- 大竹 進

研究者、諸先輩の思い出

① 江橋節郎先生 (1922～2006年)

日本の筋ジストロフィー研究のドンである。江橋先生といえば、「筋ジストロフィーにいくら研究費を使うのかによってその国の文化度がわかる」といわれておられたのを思い出す。江橋先生の主な業績は筋肉の収縮弛緩にカルシウムイオンが大きな役割を果たすことを発見¹⁾されたことであり、次に語る杉田秀夫先生

の師匠でもある。筆者も江橋先生に可愛いがっていただき、1980年代に日本で行われたESTというCANP (calcium-dependent neutral protease) 阻害薬の筋ジストロフィー治験の臨床面を任せていただいた。残念ながらこの薬は効果がなく、製薬会社では30億円の損失が出たという(写真1)。

② 杉田秀夫先生 (1930～2019年)

杉田秀夫先生には1979年1月に初めてお会いした。1978年末に新

設の旧 国立精神・神経センター(現国立精神・神経医療研究センター)を初めて訪問し、当時の里吉栄二郎総長に挨拶に伺った。「何をやりたいのか」と聞かれて「筋肉の病理です」と答えたら、すぐに疾病研究第一部室長の埜中征哉先生の研究室に連れて行かれ、その日のうちに埜中先生の弟子となった。第一部の部長は杉田秀夫先生であった。杉田先生の業績はクレアチンキナーゼ(CK)が筋疾患患者で高値であることを明らかにしたことである²⁾(写真2)。当時は東京大学神経内科と掛け持ち勤務をされておられ、当日は不在な